

Topic 1

◇ 新学年への進級 成功した先輩・失敗した先輩

年が明けました。学年末テストまでまだ1ヶ月以上の「余裕」がありますが、この期間に意識することは、新学年の学習法です。学年が上がると学校での環境が変わり、いままでできていたことが出来なくなったり、新たにやらなければならないことが増えたりして、勉強時間が減り、成績を落としてしまう人が出てきます。先輩たちの成功、失敗の体験談をもとに、今やるべきことは何かを確認しましょう。

【新高3生】

成功した先輩

①第一志望の大学のレベルを基準に、おおよその併願校も決めました。その際、塾の先生からのアドバイスで、受験科目を統一しました。勉強すべき科目が決まったので、楽に学習計画を立てられました。部活（サッカー部）では責任あるポジションを任せられ、また練習時間が長くなりましたが、勉強計画が立てられていたので、模擬テストごとに苦手分野を克服していくことができ、成績が伸びました。

②「部活を言い訳にして受験勉強時間を減らさない」ことだけを心掛けて過ごしました。本格的に受験勉強を開始した（学校の勉強以外の受験勉強時間を確保した）のは、冬休みからでした。周りは秋ぐらいから始めている人もいて焦りましたが、勉強時間が確保できれば成績は上がると信じて、1日2時間の受験勉強（学校の課題や予習復習以外の勉強）を続けました。どうしても出来なかった日は週末にその分余計に勉強しました。「受験勉強時間記録表」（受験勉強の時間帯をマーカーで塗りつぶす簡単なもの）をつけて、勉強時間が一目で分かるようにしておくことで、「受験勉強時間を減らさない」という意識が持続できました。

失敗した先輩

①冬休み中の学校の課題の提出が間に合わず、受験勉強の開始が遅れました。2月に入ると苦手の物理の学年末テスト勉強に時間を取られて、結局、受験勉強を開始したのは、学年末テストが終わってからでした。あとで「受験勉強の開始が1ヶ月遅れると、第一志望の合格可能性は10%下がる」ということを知り、3ヶ月以上を無駄にしたことを後悔しました。

②周りが受験を意識して勉強し始めていたので、私も冬休み前からやろうと思っていました。苦手な英語の対策をしようとして受験問題集を解き始めましたが、難しすぎて途中で投げ出してしまいました。周りの友だちが受験勉強を進めていくのを見ながら焦りだけが募りました。冬休み後に俊英館に入り、勧められたベーシックウェブの英語を1ヶ月で見終えた頃から英語が分かり始めてきたように思います。冬休み前からベーシックウェブを見ていればもっと楽に受験勉強ができたはずだと思います。

ポイント

受験を意識した生活を始動できるか、軌道に乗せられるかがポイントです。「やらなくちゃいけないのは分かっているけど、〇〇（部活や学校の課題など）に時間を取られて、すぐに始められなかった。」「ずるずると無駄な時間を過ごしてしまった。もう少し早く始めていればよかった。」というのは、毎年少なからず先輩たちから聞く後悔の弁です。やるべきことをまず「やってみる」、できなかつたら、できるようにするにはどうすればよいか考えて、もう一度「やってみる」ことが大事です。

【新高2生】

成功した先輩

学校では2年生から理系コースを選択し、物理と化学を履修することになっていました。特に物理は難しいと聞いていたので、学校の授業の予習をベーシックウェブで3月から始めました。定期テスト期間以外は、毎週2時間ずつベーシックウェブで予習を進めていったら、4月の学校の授業開始のときには1単元分学校より先に進めることができ、余裕を持って中間テストに臨めました。この中間テストでは、クラス1位の87点をとることができました。

失敗した先輩

2年生になってクラス担任が数学の先生になり、放課後補習（テスト不合格者が参加）が強制になりました。数学が1年生のころから苦手だった私は、補習を受けることが多く、部活に遅れてしまうのがとても嫌でした。嫌々やっていた補習では成績が伸びず、最後まで数学が負担になりました。1年生のうちに苦手を克服しておく（補習を受けない程度の学力はつけておく）べきでした。

ポイント

2年生はよく中だるみの時期と言われますが、環境の変化についていけずに成績を落とす人が少なくありません。予測できる環境の変化や、苦手科目の克服は1年生のうちに対処し始めておくことで、効率的な学習ができます。

[新高1生]

成功した先輩

私の高校受験は、いわゆる「チャレンジ受験」でした。どうしても入りたかったので受験しました。運よく合格した後は「高校にビリで入った」という焦りがありました。落ちこぼれないよう、高校合格直後から、高校から出された課題や予習を塾の先生たちに質問しながら進めました。おかげで4月の入学後テストは平均点を超えましたが、中間テストはもっと難しいと言われていたので、新たなプレッシャーを感じました。ずっと気を抜かずに頑張ったおかげで、1学期の通知表でクラス8位が取れて大きな自信となりました。

失敗した先輩

高校受験の日まで持ち続けていた緊張感が受験が終わったらなくなりました。とにかく合格までは頑張ろうと思っていたので、合格できたら安心してしまったのだと思います。1学期の中間・期末テストはボロボロでした。いままで見たこともないような点を取って、何から勉強すればよいか分からなくなってしまいました。夏休みからは、塾に入り先生のアドバイスを聞いて、苦手克服に取り組んでいますが、学校の授業は先に進んでいくので、苦手単元の克服にいまだに苦勞しています。

ポイント

中学時代に優秀だった人も、高校合格後から入学までの間に何もしなければ、高校の成績はかなり厳しいスタートになります。一度成績が落ちると、そこから挽回することがとても難しいのが高校の学習です。「スタートダッシュが肝心だ」と毎年同じように中3の皆さんに訴えています。毎年同じように成績を落としてしまう人が絶えません。そうならないためにも、高校合格後（受験が終わった日から）の勉強をしっかり行ってください。その際は、中学の復習より、高校の予習を優先させましょう。

Topic 2

◇ 高2・高1のセンター入試活用法

2015年1月17日(土)、18日(日)に大学入試センター試験があります。来年、または再来年に皆さんが挑むことになる試験です。高2、高1の皆さんも実際に解いてみて、センター試験のレベルを肌で感じてください。

◇高2生 「AU20 高2センター即日模試」を受験しよう！

高3と同じ本番のセンター試験の「英語、数ⅠA、数ⅡB、国語」を受験してみよう。AU20 高2センター即日模試」では、本番さながら模擬テスト形式で受験することができます。

すでにセンターの出題範囲は、ほぼ学習が終わっているはず。1年後の志望校の合格ラインの得点（最難関国立大 90%、難関国立大 80%、中堅国立大 70%）から20点引いた点を目標点として、その目標点が取れるかどうかを確認して、現時点での苦手単元の克服に着手してみよう。

◇高1生 既習科目のセンター試験を、時間を計らずに解こう！

高1生は、「英語、数ⅠA、現代文」を受験してみよう。時間を計らずにじっくり解いてみて、どのくらい解けるのか確かめてみよう。その際、英語や現代文では、辞書を使っても可。数学で解き方を調べても可。現在の持っている力をフルに働かせて解いてみよう（あきらめて、答えを先に見てしまうのは不可）。センター試験の「難しさ」が実感できるはず。

1 遠隔授業 高校で解禁へ

大学教育の現場において、テレビ電話会議システムを使った「遠隔授業」が広がりを見せている。小規模な単科大学など、複数の大学が連携して、それぞれの強みを生かした多様な科目を開設できる利点がある。この遠隔授業はこれまでも大学や通信制高校では認められていたが、全日制や定時制高校は教員と生徒が直接対面する授業が原則となっており、認められていなかった。しかし、離島や過疎地の高校から、高校教育における解禁を求める声が強まり、文科省は離島や遠隔地に限らず導入を決定した。認められる遠隔授業は「生中継」のみで、録画した映像を使う「オンデマンド型」は、病気で療養中の生徒などに限定して認められる。

2 AO・推薦合格の生徒はセンター受験 4割の高校で

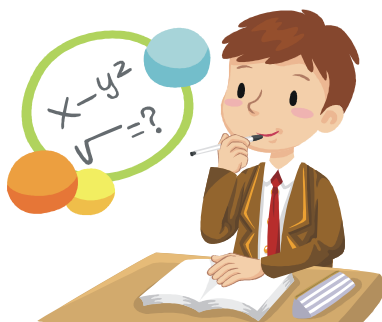
AO・推薦入試で早々と大学合格を決めた生徒に対し、高校側が卒業までに学力保証のために取る対応について、ベネッセが昨年11～12月に無作為に選んだ全国の高校の校長1228人に取り組みを複数回答で調査。その結果、センター試験を受けさせている高校が43.2%と最多だった。また、かなりの数の高校で、TOEIC等の検定試験に向けての対策を行っていることが明らかになった。

3 学費軽減のサポートに注目

ここ近年、大学入試では、インターネット出願による「ネット割引」や併願割引制度など、受験生をもつ家庭の経済的負担の軽減のため、さまざまなサポートを実施する大学が増えている。私立大学の入学検定料は、一般入試は35,000円程度、センター試験利用入試は15,000円程度が標準的な価格であるが、中には女子栄養大学や東洋学園大学など、入学検定料そのものをかなり安く設定している大学もある。さらに、従来ごくわずかな成績上位者だけが支給対象だった奨学金についても、近年は支給対象の拡大傾向が続いている。給付額は、年間の授業料全額相当から20～30万円程度まで、返済不要の奨学金制度を組み込んだ特別入試(スカラシップ入試、奨学生入試、特待生入試、給費生入試などの名称で)を実施している大学も増加している。一般入試の1つとして実施されるスカラシップ制度では、合格してスカラシップ生に採用されれば、かなりの負担軽減が可能となる。大学を選ぶ際は、せっかくのチャンスを活かせるように、奨学金制度を詳しく調べる受験生が増えているという。

4 2015年度入試 出願傾向

少子化が続く中、2014年度は前年度に比べて18歳人口が約5万人減少し、大学入学者数も約9千人の減少となった。大学の収容力(全志願者数に対する全入学者の割合。広い意味での合格率)は、限りなく100%に近く、実態はまさに“大学全入時代”である。「入りやすい大学はより入りやすく」なり、一方では難関大学や人気大学の「入りにくさ」は変わっていないため、「希望すればだれでも入れる」にもかかわらず、受験生から敬遠されて定員割れになっている大学と、入りたいけれど合格が難しく、常に高倍率になっている大学との二極化現象が進むと予想されている。また、「資格が取れる」「就職に有利な」学部・学科が注目されるなど、「国公立志向」「地元志向」「安全志向」というここ近年の出願傾向は、2015年度入試でも、あまり変わらないと言われている。



◇ 大学入試を基礎から知る

第8回 <大学入試用語 その2>

オープンキャンパス

受験生や保護者を大学に招いて、入試日程や大学の概要の説明、学内見学や模擬授業、受験生のさまざまな疑問に個別相談で応えるなど、志望校を選ぶのに必要な情報を直接得ることができる機会となる。

調査書

出身高校または在学中の高校で発行される書類で、入学志願者の学業成績、健康状況、出欠状況、特別活動の様子などが記載されている。大学受験の際には必ず提出しなければならない。推薦入試では、調査書の内容を重視して選抜が行われている。また、一般入試でも、入試結果がボーダーラインの場合には、調査書が合否に影響することもある。

志願倍率

入試の競争率を示す数値のひとつで、志願者数を募集人員で割った数値。実際の倍率は、志願倍率よりもかなり低くなるのが一般的なので、「見かけの倍率」と言われている。これは、出願しても受験しない人がいたり、大学側も入学辞退者を見越して募集人員よりも多めに合格者を出すことが多いためである。志願倍率の高さに惑わされないことが大切である。

実質倍率

入試の競争率を示す数値のひとつで、受験者数を合格者数で割った数値。志願倍率と異なり、受験者数と合格者数から算出されるため、実態に即した倍率といえる。志望大学の過去の競争率を知るには、実質倍率を参考にするとよい。

指定校制推薦

推薦入試の制度のひとつで、大学が指定する特定の高校に限って出願を認めるもの。指定する高校は、過去の入学者の実績などを考慮して決められる。また、キリスト教系の高校に限るといった大学や、大学が設置されている県や市の高校に限るといった条件を設けている公立大もある。

自己推薦

受験生自身が、自分の能力や実績をアピールし、大学側が学業成績と合わせて合否を決める推薦入試の制度。近年、目だって増加し、多くの私立大学で実施されるようになった。学校長の推薦状を必要としない場合が多い。

大学入試センター試験利用入試

多くの私立大で実施されている入試制度で、2014年入試では、私立大学全体の約90%にあたる521校で、このセンター利用入試を実施している。大学が指定した大学入試センター試験の科目の得点のみで合否を判定する方式と、センター試験の得点と大学独自の試験の得点の合計で合否を判定する方式がある。センター利用入試は、一度センター試験を受験しておけば、多数の大学・学部に出願できるので、合格チャンスが広がるメリットがある。ただし、大学・学部により利用するセンター試験科目が異なるので、自分が受けた科目が利用できる大学・学部に限られる。

試験日自由選択制入試

多くの私立大で実施されている入試制度で、同じ学部・学科の試験が複数日行われ、受験生は試験日を自由に選択して受験できる。同じ学部・学科を複数回受験することもできる。

全学部日程入試

最近、私立の総合大学で行なわれるようになった新しい入試制度。全学部・学科が同一問題で、同じ日に一斉に行う入試で、募集人員が少なく高倍率になりがちだが、1回の受験で複数の学部・学科を受験できるので、受験機会を増やせるメリットがある。全学部統一入試などとも呼ばれている。